
聖術師と銀の隊長

山田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖術師と銀の隊長

【Nコード】

N1849U

【作者名】

山田

【あらすじ】

聖なる力をこめて歌うことで、魔族の呪いから国を守る役目の聖術師。主人公であるルアも聖術師の一人で、毎日、国の中央にある聖堂で歌を歌う日々を過ごしていた。ただある日。戦いの最前端であるラナン塔へ緊急配備されることとなってしまった。そこで、ルアは銀の髪を持つ隊長と出会い・・・。

前編

私の名前はルア・スターチス。

今年で22才となり、少女とはもう言えない歳だけど、女と言うには胸と腰、お尻のあたりの凹凸が寂しすぎる体系。いわゆる寸胴というやつ。

仲間には、細くて羨ましいなんていわれるけれど、ムチムチで色気バツチリの

出るとこ出てる完璧ボディな女性に言われると逆に悲しくなる。

腰までの長い黒髪に青い瞳。取り立てて珍しくも無い色合いに顔立ち。

特に自慢できる頭も容姿も持っていないけれど、私には唯一自慢できる特技がある。

特技というのは少し違うが、私は聖なる力を持って生まれた希少な人間らしい。

その力を持っていたおかげで、小さい頃に国に保護され、力を正しく使うための訓練や教育を無料で受ける事が出来た。

まあ、その代わり、強制的に国のために働くことになるのだが、それは嫌ではない。

むしろ職が得られて、万々歳だ。

15才の時に訓練を卒業して、それから7年間、国の中央にある聖堂で数人の同じ力を持つ仲間と

歌を毎日歌い続けた。

歌を途絶えさせてしまうと、魔族の呪いが人々を蝕み死に至らせ、大地を汚す等、恐ろしいことになってしまうから。

私達、聖なる力を持ち、聖歌を歌うことが出来る者を人々は聖術師

と呼んでいるのだが。

その聖術師がいない地はすべて呪われているのかというところではなく、魔族とよばれる種族が呪いを撒き散らして、私達の住むレウイシア国を乗っ取るうとしているから、国の中心で歌っている私達が歌を途絶えさせると、魔族がこれ幸いと攻撃をしかけてくるということであって、すべての場所に呪いがかかっているわけではない。魔族は世界を自分達のものにしようとしているらしく、つい先日、レウイシア国の西側にあったスパラキス国を滅ぼしてしまった。そのままの勢いでレウイシア国に攻め込んだようだが、我が国は優秀な騎士団と聖術師が揃っており、易々とは侵略されはしないし、させるつもりもない。

西側の国境近くに立てているラナン塔には第三騎士団と第四騎士団が駐在していて

彼らが壁となり、魔族はこれ以上、レウイシア国へ進行することが出来ない状態となっている。

城からは遠いラナン塔の位置あたりから、魔族が呪いをかけてくるのを防ぐ、それが今私のお仕事。

そう、今までは。

今日も聖歌を歌うため、朝担当の人たちと交代しようと、私は友達のトレニアと聖堂に向かっていた。

「昼担当なんて早く終わらないかしら。夜の静まった空気の中で歌う方が断然良いわ。」

とトレニアが美しい顔を少し歪めてため息をつく。

「まあ、見学者が一番多いのは昼間だから。」

私が苦笑して言う。

「人にじろじろ見られて喜ぶのなんて、ラークスだけよ。」

いつそ、あいつを広場で一人歌わせて、私達は扉を閉めた室内でひっそり歌うつてのはどうかしら。」

その提案、ラークスは喜んで受けるだろうが、広場と室内では距離が遠く連携が取れないから無理だ。

トレニアとたわいも無い話をしていると、腰に剣をつけ今すぐにも戦える準備が万全という姿をした背の高い男が3人と聖術師をまとめる役割の大臣が、少し早足でこちらへ歩いてきているのが見えた。

通り過ぎて行くのだろうと思ったら、私達の目的である聖堂の扉の前で彼らは止まる。

そして、大臣が私達のほうへ向かって呼びかける。

「昼担当の者達は朝担当と交代する前に話があるから、私のところへ集まるように伝達してくれ。」

そう言うのと、扉を開けて中へ入っていった。

朝担当の人たちが歌う中、私達昼担当と背の高い3人の男と大臣が聖堂の端に集まった。

大臣が中央に立ち、その後ろに3人の男が並び、その向かい側に昼担当の人たちがいる。

昼の担当は合計10人、向かい合っている男3人より人数は多いけど、3人がかもし出す怖い雰囲気

私達は飲まれていた。怖いというのは顔ではなく、戦い慣れしている雰囲気

が怖い。

彼らはきつと、いや確実に日々戦いに身をおいているのだろう。

城の中央で守られて歌を歌っている私達には刺激が強すぎるのだ。

大臣が振り返り、3人に尋ねる。

真ん中にいた人が代表で話す。

「来てくれるだけで、万々歳ですよ。時間が無いから、すぐに戻りたいのですが、いいですか？」

大臣は頷き、私たちに向き直る。

「君達はラナン塔へ配備されることに決まった。急ではあるが、すぐにここを発つてもらう。」

3時間後に荷物をまとめて、またこの場所へ戻ってくるように。」

大臣は私達に行けという風に、右手を振ると。朝担当の聖術師の元へ向かった。

私達はしばらく啞然として意味も無く大臣の向かって行った方を見ていたが

3人の内の1人が話し始めたので、そちらを向く。

一番右側にいる、一番背が高く、固い顔をしている人だ。

「俺達はラナン塔に配備されている、第三騎士団の者だ。

お前達には不運だろうが、まあ、国のためだと思ってあきらめてくれ。」

それから、私達はのろのろと自分の部屋へ戻り、よく頭の整理が出来ないまま

必要だと思つたものをカバンに詰め込む。

同部屋のトレニアは彼氏に別れの言葉を言うことが出来ないなあ、と呆然と窓の外を見ながら呟いていた。ラナン塔に配備されると言う事は、数年で戻ってこれるわけが無いと言う事。

ここラナン塔では遠すぎて、会いに戻ってくることも出来ない。恋人ではなく、家族がいる場合、希望者はラナン塔が立っている町へ国が住まいを設けてくれる。

私には恋人がいないため、トレニアの悲しさは分からなかったが、少しでも心を慰めるため

後ろからそつと抱きついた。トレニアも抱きしめ返してくれた。

それから3時間後、私達はこの都市から旅立った。

ラナン塔へは馬車で向かったが、その中で騎士達が今回の緊急配備について何があったのかを教えてくれた。

聖術師という呪いを跳ね除ける存在は、実はラナン塔にも前から10名ほど配備されていたのだ。

戦いの最前線であるため、年を重ねた経験豊かなものが居た筈なのだが、どうやら全員

魔族に殺されてしまったらしい。

その将来自分の身にも起こりうる事実にとつとしたが、ふと疑問が湧く。

聖術師は戦いに参加することなく、塔の中で守られて歌を歌っているのではないのか。

だとしたら、城の中にまで攻め入られるような戦況で、ラナン塔は危うい状態なのか。

騎士はその事は否定してくれた。ラナン塔は十分、壁の役割を果たしているようだ。

ではなぜ、聖術師が皆、死に至るような事態となったのかというと、魔族が戦い方を変えてきたからだそうだ。

聖術師の一人が城壁の向こう側、魔族がいる外側で泣いている子供を見つけたことから始まった。

その子供を見つけた聖術師はあわてて保護に向かい、その子連れれて、仲間の元へ戻っていくと

その子供が急に奇声を発して、おぞましい姿、魔族へと変わったのだ。

どうやら、その子供はボールか何かを取りに無断で壁の向こう側へ

おりて、魔族に体をのつとられたらしい。

騎士が異常を感じて、駆けつけ、魔族を倒した時には聖術師は全員殺されていた。

その魔族の奇襲を受けた際に、一人の聖術師が塔の中から高く投げ出され、外で待機していた

魔族に連れ去られようとしたらしい。それは、第三騎士団隊長が阻止したらしいが、その聖術師は高く投げ出された時点で死んでいたようだ。

やつらの狙いは聖術師へ移っているから、気をつけるようにと言われ、話は終わった。

1週間かけてラナン塔へたどり着くことが出来ただけだけど、移動手段を馬車に変え、船に変え、荒い地を歩いたり、歌う為の体力をつけるために運動はしていたが、それ以外の筋肉をつける努力はしていない聖術師の10人はヘトヘトとなっていた。

だけど、たどり着いたラナン塔の様子を見ると、疲れたからと言って布団に転がって休んでいい状態ではないことはすぐに分かった。ラナン塔にいた10人の聖術師が死んでから、おそらく約2週間、それから呪いを跳ね除ける歌がないためだろう、空は昼間なのに暗く、紺と緑の斑に染まり、空気はどんよりしていて、腐ったようなにおいが充満している。

私が今いる聖術師のグループのリーダーであるラークスが、青ざめた顔をしながらも皆をまとめる。

「3班に別れ、昼の班はすぐに聖堂で聖歌を。夜の班はすぐに休憩。朝の班は全員の荷物を整理してくれ。以上、皆頑張ろう。」

そう言うと、ラークスはランタン塔の責任者に会いに行った。

私は昼の班だったので騎士の人の案内で聖堂へ向かう。

聖堂へ向かう途中、騎士の団体とすれ違った。

先頭にいたのは、銀髪と紫の瞳をした綺麗な男の人だった。綺麗といったが、それは歩き方とか雰囲気綺麗であって、女の人

のようだと言う事ではない。

むしろ、高い身長に切れ長の瞳、鍛え抜かれた体をもっていて、女性達を魅了するような容姿をしている。

上から下まで黒色で所々に銀の刺繍が入っている重々しい軍服を着て、肩甲骨くらいまでの長い銀髪はくくらずに背中に流している。

すれ違う時、私達を案内していた騎士が、彼に声をかける。

「隊長。また出るのですか？少しは休んだらいかがですか。聖術師の人たちも到着したことですし。」

こちらを指差した男につられて、彼は私達の方へだるそうに視線を向ける。

「俺の勝手だ。」

私達への興味はまったく無いのだろう。視線はそのまま通り過ぎた。

聖堂には呪いの進行がひどい人たち、騎士も村人もたくさん集まっていた。

1回の歌では直らないだろうけど、呪いによる死人はまだ出ていない。ほっとした。

旅の疲れと、何とかしなければならぬという必死さで時間の流れも分からないまま、ただ歌うことに集中していると、時間はあっという間に過ぎ去り、夜の班へ交代する時間となった。

夜の班にはトレニアがいて、交代する時に、また一緒に部屋よ。そのままだと汗臭くなるから体は洗ってから寝てよね。なんて、冗談交じりに笑って言われた。

洗い場で汗を流し、宛がわれた部屋に戻り、体力・気力回復のため、荷物の整理もせず、朝の班が整えてくれたのだろう布団にすぐにもぐりこみ、5秒と待たずに寝入ってしまった。

今まで住んでいた都市は、夜になるとシンと静まりかえり、耳を澄ませば虫の鳴らす綺麗な音が時々聞こえてくるといふ穏やかな夜だった。

でもラナン塔は夜だからといって、魔族の攻撃がやむわけもなく、戦いの生々しい音が聞こえる。

それでも、今日の私は疲れきっていて、遠くで聞こえる戦いの音に反応して起きれるような状態でもなかったし、仲間の数名が怖くてこれからの事が心配で眠れない人も居たようだけれど私はぐっすり寝入っていた、のどの渇きによって、夜中にふと眼が覚めるまでは

瓶に入った水を飲んでも、渇きが収まらず、無いと思うともっと欲しくなった。

私が今いるのは塔の5階で、3階に食堂がある。

その食堂に水がめがあり、毎朝、騎士の人たちがためてくれると言った話だった。

このままだとしばらく眠れそうに無いとそうそうに決断した私は瓶を持ち、食堂を目指す。

食堂は300人ぐらい、いつせいに食事が出来るほど広く作られているため、夜中に一人でいるのは

正直怖い。少し早足で水がめまで行くと、すぐに瓶へ移す。

水を見ていると、このまま戻って飲み足りなくて、また戻ってくる

のは嫌だなと思い。

ここで少し飲んでから、帰ることにした。
でも、怖いから、水がめの横に座り込んで、隠れるようにして水を飲む。

さて、戻ろつかと少し腰を上げると、食堂のドアが開く音がした。
私はその人の姿は見えないし、相手からも私の姿は見えないはずだ。
私のほうは何の音も立ててないはずなのに、入ってきた人はどうやら気配に気付いたようだ。
すごい。

「・・・誰だ。」

低い声で、敵対心あらわに尋ねられると、ひやりとする。
すぐに立ち上がり、怪しいものではないと主張した。

「わ、私です！」

変な答えになってしまったが、何でもいいから何か言っ、警戒を
といてもらいたかった。

現に、相手を見ると短剣を抜いていた。

恐ろしい、抜く音なんてしなかったのに。

「誰だ。」

眉根を寄せて睨みつけられたけど、剣は鞘に収めてくれた。助かった。
た。

「今日ここへ来た聖術師です。はい。水が飲みたかったので、ここに
来ました。」

瓶を右手に持ちあげ、左手は手のひらを相手に向け、完全無害です
よとアピールする。

男の人はふらふらとした足取りで、此方へ向かってくる。
目の前まで来て、やはりと確信するが、昼間すれ違った銀髪の人だ。
この人も水を飲みに来たらしく、水がめの前にいる私を、無言で押
しのけ、近くにあるコップを使って水を飲み始めた。

私に対する興味を失ったことを確信すると、出来るだけ物音を立てないように、そりそりと

扉へ足を進める。

扉に手をかけ、そういえばあの銀髪の人、隊長って言われてたなと思いつく。

と言う事は偉い人だ。偉い人には一言挨拶して退出するべきなのかと一瞬迷う。

だけど、恐怖が勝り。機嫌悪そうだし、言っても無視されそうだし、いや逆に迷惑になる、そうだと自分で納得して、扉を開けようと力をこめた時、後ろで机と椅子が音を立て、何かが倒れる音がある。

振り向くと、銀髪の人が頭を抱えて、床に倒れこみ苦しんでいた。

私はすぐに駆けつけ、瓶を近くの床に置くと、銀髪の人頭を抱え込む。

振り向いた時、遠目から見ても、この人の周りに緑色のもやが来て、呪いの進行がひどいことが明らかだったからだ。

顔色は真っ青になり、眉根をよせ、目も開けられないようだ。

銀髪を耳にかけ、此方へ向ける。呪いがひどい人に効くもつともい方法はない、直接聖歌を叩き込むことだ。

鼓膜を傷つけないように、囁くように、でも聖なる力はいっぱい込めて歌う。

途中で休み休み、床に置いた瓶から水を飲みつつ2時間ほど歌っただろうか

気付くと、銀髪の方は私の腰に腕を回し、眠ってしまったようだ。彼は昼間とは違い、生成り色の簡易な服とこげ茶のズボンとブーツを履いていた。

その首元にはペンダントをしていて、手にとって見てみると、どうやら呪いをよけるためのものだった。

昼間はそれで抑えられるだろうけど、夜は魔族の力が強まり、先ほどのように苦しむ日々だったはず。

昼間もこのペンダントがあるからと言って、体と心の痛みから解放されるわけではなく軽減されるのみで、しかも、呪いは日に日に体と精神を蝕んでいく。

よく今日まで耐えたものだ。

このペンダントはもう使い物にならない。

呪い負けしてボロボロになっていた。先ほど壊れてしまったのだらう。

床に置いた瓶から一口水を飲み、また歌い始める。

この頑張っている人の痛みが和らぐように、銀の髪をなで、そう願いながら歌う。

朝日が昇る前に銀の髪の人を目覚めた。

頭をなでていた手をとられ、その手から私の顔までめぐるように視線が動き。

眼と眼があう。

そのとき、私は掴まれている左手が咎められているような思いに囚われ、なぜ頭までなでた自分！！と心の中で責めた。

銀髪の方は体を起こすと、私を痛いくらいギュッと抱きしめてきた。圧死される！

口を開き懇願しようとする。

低い声が耳元で聞こえた。

「名前は。」

殺す前に、相手の名前を聞くタイプですかそうですか。

「違うんです。とっさに。」

いえ、意味は無いんですよ。

本当に、信じてください。

ごめんなさい。」

そう私が混乱ぎみに言うと、銀髪の方は、少し体を離してくれた、手は私の体に回したままだったが。

苦笑したような顔で、私の顔を覗き込んできた。

「お前、何言ってるの？」

名前だよ、お前の名前。俺の名前はアギ・ストレプト。一応、第三隊長。」

そう言つと、彼、アギ隊長は立ち上がり。

首にある壊れたペンダントを見ると

「くそつ。役にたたねえ。」

そう言つて、そのペンダントを食堂の隅にあるゴミ箱に捨てた。

扉のほうへ行くからそのまま出て行くのかと思つたら、扉の前で振り向き

「おい、名前は。さつさと言えよ。」

少し眉根をよせ、低い声で言われたので、焦り気味に答える。

「ルア・スターチス。」

私の言葉をきくと、アギ隊長はいたずらっぽく笑い。

「またな、ルア。」

そう言つて、出て行った。

部屋へ戻り、夜通し力を使ったせいか、交代のために起こされるまでぐっすりだった。

昼の班の仕事をきっちり終えて、夜の班と交代すると体を洗いに行く。

その帰り道に前日のようなことが無いように、食堂へ寄り、瓶へ水をいっぱいまで入れて部屋へ戻る。

と、5階にある数ある中の1室の前に、アギ隊長が腕を組んで仁王立ちしていた。

その部屋は私とトレニアの部屋だ。

私が気付く前にアギ隊長は此方に気付いていたらしく、ニヤリと笑っていた。

そんなアギ隊長の前まで、私は気分が重くのろのろと進み、彼の前まで来ると頭を下げる。

「昨日は大変申し訳ありませんでした。」

昨日の頭をなでるという行為を後悔していたため、ついつうかり出た言葉だ。

「はあ？良くわかんねえけど。行くぞ。」

アギ隊長は私の言葉を深く探ろうとはせず、私の右腕をとって、歩き始める。

あわてたのは私。

「え！？ど、どこへ。」

「俺の部屋。」

「は！？？」

私の疑問をこめた声を聞くと。

私の右腕を引き、顔を近づけ、そして睨みつけてきた。恐ろしい！

「お前が俺を救ったんだろ！ちゃんと最後まで責任取れ。ほら、いくぞ。」

引つ張られていった先は1階にある隊長室。他の部屋は1部屋しかないけど、

隊長室は2部屋あり。ひとつは会議と仕事部屋で、奥にあるもう一つの部屋が私室となっていた。

普通より少し大きなベッドに言われるままにちょこんと座ると座った私の膝を枕にして、アギ隊長が横になる。

ふと我に帰ると、この体制はすごく恥ずかしいのではないか。

うーんとうなって考え事をしていると、下から見上げられ、歌は。

といわれたので
羞恥心はいったん脇において、これは治療これは治療、と自分に言い聞かせた。

今日も日が昇る前に隊長は目を覚まし、私がいるというのに服を着替え

戦いに出る支度を整えている。

じつと見ていた私の目線に気付いた隊長は、ふつと笑い。

「そのベットで寝ろ。」

と命令してきた。

え、と呆然としてその言葉の意味を処理している間に、アギ隊長は部屋から出て行った。

そんなことを言われてもそのままベットを使うわけにも行かず、私は自室へ戻りすぐに眠った。

そしてそれからなぜか、私は毎晩アギ隊長の部屋で膝枕をしながら歌を歌うこととなった。

まあ、重度の呪いを受けている状態だから、治療するのは別にかまわないけど

それなら朝も昼間も大人しくして、治療を受けて下さいといったら戦いは止められないとのこと。

一度、塔の窓から、遠くでこの人が戦っている姿を見たけれど

一番に敵の真ん中に突っ込んでいくのを見ると、正気を疑った。

みんなのために戦ってくれていると思っていたけど、この人はただ単に戦闘狂いなのかもしれない。

一番初めにあつた時、歩く姿や雰囲気は綺麗だと思ったけれど、戦う姿も綺麗で強い。

この人が怖がりもせず、一番に突撃して、なおかつ圧倒的な強さを

見せるから、他の騎士達も怖気づくことなく、敵に向かっていくことが出来るのだろっなと思う。

第3隊は個々の能力が高く、個人プレーで敵を倒していくのに対し、第4隊は3隊のサポートに周り、チームを組んで確実に敵を倒し、3隊の援護もこなすという、上手い戦闘隊形がとれていた。

でも、やっぱり皆が到着する前に敵のど真ん中に突っ込んでいくやり方は賛成できないし、見ていて怖い。

「せめて、周りの準備が整ってからにしてはどうですか？」

そういうと、私の膝を枕にして、横になっている人は

私の頬に手を伸ばし、数度なでてくる。

きつと顔が赤くなってるはず、熱い。

そんな私を見て、彼は子供のように笑った。

「考えとく。」

中編

俺の名前はアギ・ストレプト。

戦うことが大好きで、いつでも一番に戦場に飛び込み他のやつらより成果を上げることが快感でたまらなかった。

そうやって、戦いの日々を続けていたら、いつの間にか隊長にまでのし上がっていた。

皆をまとめるよう指示することや、新人の育成なんか面倒くさくて放棄していた俺だけど

隊の皆は色々文句を言いながらも付いてきてくれた。

生まれてから28年、隊長になってから3年。

25年間は特に守るべきものは無く、自分中心で考えてきた。

隊長になってからも、それは変わることが無いと思っていたが

俺にも人間らしいところがあつたようで、隊のやつらを死なせたくないなんて思えてきた。

隊のやつらが時々話す家族のことも、飲みに行く店のやつらのことも。

そんな思いに比例するかのように、戦場へ向かう頻度も、危ないギリギリの戦いも

さらに増えてきた。

皆が何を言おうが俺はそれがかまわなかった。

ただある日、魔族がとんでもないことをしてくれた。

人間の子供を装い、塔の内部に潜入して聖術師を皆殺しにしたのだ。

俺はそのとき、見回りから帰るところで、塔の異変に気付き上を見上げると

聖術師の一人が窓から投げられているところだった

その落下地点には魔族が12体ほど潜んでおり、聖術師を受け止めた後、逃げようとするところを

そつはさせまいと魔法を使い電撃を落とし、足止めをする。

聖術師は取り囲まれて、こちらからは姿が見えない。

電撃で一時体が麻痺している魔族を追い抜き、駆けながら抜いた剣を使い、奥にいた一番小さく細い魔族の胴体を切り落とす。

魔族の緑色の体液が体にかかるが気にせず、奇襲に狼狽している魔族達が立て直す前に2対目に目標を定め剣を振るう。

体液を浴びると呪われるという理由があるため、いつもはそこに注意して

切り方や切る場所を考えながら戦うのだが、今はそうは言っていない。

体液の事は気にせず、聖術師を魔族にさらわれないように、ただそれだけを考えて戦う。

12体の内2体を瞬時に倒すと、方向を変え距離をとる。

追ってきた8体から距離をとりつつ、聖術師の姿を確認し、聖術師を抱えた魔族2体の様子を探る。

俺が急に攻めてきたことに慌てているらしく、もたついていた。

ならば、立て直す前に一気にけりをつけてやろうと、追ってきた8体に電撃を落とし一瞬足を止めさせる。

その隙に間を駆け抜けようとするが、一度目のように全員に電撃が行き渡らず

電撃が上手く効かなかった図体のかい2体にすれ違う瞬間、足を狙われたが

スピードはこちらの方が上だったため難なくよけて、聖術師を抱えている2体へ襲い掛かる。

聖術師を捕らえていたやつ、腕と思われる部分を切り落とすと、すぐに聖術師を取り落とした。

聖術師の襟首を掴み塔の方へ引きずりながら剣と魔法で魔族を近づけないようにする、と

そこで応援が到着し、それから戦いは瞬く間に終わった。

結果は、魔族の群れを倒すことは出来たが、取り戻した聖術師は死んでいた。

さらに、呪いを大量に浴びてしまい、ただ歩くことでさえも鈍い痛みが走るようになった。

夜はさらにひどく、頭と体を締め付けるような痛みが続く。薬を飲んで、ようやく眠れたかと思ったら、見るのは悪夢。

呪いは体の痛みよりも精神攻撃のほうがつい。

5日で精神も、体力もボロボロになったが、聖術師がいない厳しい状況で

隊員の士気を落とすことは出来ない。

体の痛みより、精神を攻撃されるほうが辛く、この状態で一日でも休んでしまうと、暗い考えに落ちてしまいそうだった。

同じ隊長である、第4隊軍団長デュランタには気付かれたが、俺の思いを汲み取ってくれて

ただ、無理はするなと呪いをはじくペンダントをくれた。

デュランタもこんな状況で俺が呪いに倒れたと知れ渡り、士気が下がるのを懸念したのだろう。

それに、聖術師がいないのに休んでも呪いが軽くなるはずも無く、俺がやると思ったら貫き通す性格をしっているからだ。

あの日から、約2週間、途中で隊員たちは戦い方や生活態度から、俺の体の状態に気付いていながらも
気付かないふりをしてくれた。

聖術師がやつと塔に到着した日、俺の精神はずたずただった。いつそのこと戦場で果てて死ぬか、このまま数日後に死んでしまうほうが

楽ではないのかと思うほどに。

昼に隊員たちと見回りの打ち合わせをしていると、第4隊長であるデュランタが

ラークスという聖術師をつれて来た。どうやらすぐに治療をしてもええと言う事らしい。

戦いをして、この塔を守るのが役目なのに、自分の体を守るためにその役目を放棄する気にならず

自分は後に回して、他のやつの治療を優先しろとか、なんだかんだ理由をつけて、見回りへ向かった。

正直、治療されるのが怖かったというのが大きい。

治療を受けて、回復したら、この苦痛を再度味わうことになる恐怖から、足がすぐみ戦場へ出ることが嫌になるのではないか。

二度と戦いに出られなくなってしまう体になるのではないか、

今までのように一番に突っ込んでいく気力がなくなってしまうのではないか、そう思ってしまう。

そんな腑抜けになるぐらいならいっそ、このままの状態で死なせてほしい。

この世界は好きだ、仲間も町のやつらも嫌いじゃない、やりたいことも結構やってきた。

思い残すこと・執着することなんて何も無い。

なら、このまま、やつらを守りながら死ぬのも悪くない、そう思う。

夜になり、見回りを交代する時間となる。

最近、夜はふらつくの隠せないところまで来ていたため、朝と昼のみ見回りに参加している。

椅子に座る仕事を夜にあてていた。

書類作りも終わり、頭痛がひどくなってきたため、嫌な思いを少しでもすっきりさせようと

水がめのところに向かう。

そこには、一人の女がいた。

倒れるまでのことはあまり覚えていないが、意識が戻ってからはずきりと思い出せる。

きっと一生忘れることはないだろう。

優しいぬくもりと、髪をなでられる気持ちよさ、その手をめぐって行き着いた先は、きれいな青。

その青色を見ながら、そういえば空なんて最近眺める余裕もないし、呪いによつて汚くなっていたが

今はどんな色をしていたらうと、ぼんやり思う。

体は少し軽くなつたし、気分も昨日より断然良い状態だ。

懸念していた、足がすくむなんてこともない。

昨日まで考えていた思いが馬鹿みたいだった。

俺が、足をすくませ戦場へ出るのが嫌になる？

誰にも弱音を吐かずにすんでよかった。

いい笑い話になるところだ。

でも、ひとつ嫌なことが増えてしまった。

あの女、ルア・スターチスだ。

ルア自体が嫌なのではなく、ルアを求めてしまう自分に腹が立つ。

きっと、苦しみから回復した気持ちよさと、ぬくもりと手に執着してしまつたのだろう。

あれから、每晚ルアに歌ってもらっているが、執着心が治まる気配はなく。

1日中でもこうして居たいほどだ。

任務中もルアがいるだろう場所をなんとなく見上げてしまっていたりする。

隊員たちに言わせると、笑う頻度が増え、時々によついでいて、気味がわるいそうだ。

そして、聖なる力がこめられた歌を直に3ヶ月も聞いていると、重度の患者ではなくなっていた。

すると、ルアからある日の夜、こう切り出された。

「少し回復しているので、直接でなくて、えーと、そうですね。」

6階の聖堂で毎日3時間ぐらい聞きにきて頂けるだけで、もう大丈夫ですよ。」

おめでとうございます。と、可愛い笑顔で言われたが、こちらとしては全然大丈夫ではない。

「行く必要がないだろ。ルアが毎晩来れば問題ない。」

「問題あります！」

いつもでかい声は出さないルアが、少しほほを染めて、怒ったようにこちらを見ている。

が、全然怖くなく、むしろ可愛い。

「わ、私とアギ隊長の関係性を、なんというか、皆があ、あ、怪しんでいます。」

「関係性？他のやつらが怪しむのが、どう問題になる？」

少し顔を険しくすると、ルアの体が少しはね、視線をさまよわせる。

「こ、恋人ではないかと・・・。」

ぼそぼそとつぶやく声でルアは言った。

「じゃあ、恋人だといえればいい。」

ルアの膝から上半身を起き上がらせる。

体の調子も気分もいい。今まではそういう状態ではなかったが今なら「やるか。」

服をぬぎつつ、ルアのほうを見ると。

真っ赤になっていた。

「やりません！」

ルアは素早く立ち上がり、そのままの勢いで早口にしゃべる。

「私たち聖術師はそういった事は神に結婚の報告をするまで、みだりに行わないのです！」

ですから、他の方々に関係があるかのごとく言われるのも嫌なのです！

今までは治療があるという理由でしたが、これ以上は仲間も納得してくれないでしょうし、私も納得できません！

だから、もうここへは来ません！」

そのまま出て行こうとするのを捕まえて、ベットに戻す。

「は、離してください。」

「言いたいことは分かった。手は出さない。でも、今日の治療はここでやってくれ。せつかく来たんだ。」

だろ？と顔を覗き込むと、真っ赤な顔で口をへの字にしつつ、渋々頷いてくれた。

次の日、俺はルアの部屋の前で腕を組んで待っていた。

その姿を見て、下から上がってきたルアは目を丸くする。

「き、昨日、私が言ったこと聞いてました・・・？」

「分かってる。だから俺の方から来たんだろ。」

ルアは眉根をよせて疑問を浮かべていた。

「俺の部屋にこないって事は、俺がお前の部屋に行くしかないだろ。もちろん、手も出さない。我慢する。」

「！ですから。」

「で、もうひとつの問題だが。」

ルアの肩に手をおき、抱き寄せ。でかい声で叫ぶ。

「ルアとは恋人同士だが、手は出さないと誓う！疑うやつは俺の所に来い！」

ルアは目を大きく開け、固まっていた。

「これで、問題は何も無い。」

そういつて、ルアと一緒に部屋へ入っていった。

声を聞いたやつらが、噂を流したらしく

町に住んでいて、塔の内部の情報には疎いはずの第4隊軍団長デユラントにまでも数日後には知れ渡っていた。

「お前はまだまだ餓鬼だな。」

そういつて、ため息をついていたが、どう言われようとかわわない。ルアを求めてしまう自分も受け入れていた。

後編

数日は私の部屋で、なぜか以前と変わらずアギ隊長に歌を歌っていたが

トレニアから苦情を受け、またアギ隊長の部屋で歌を歌う日々となった。

歌うと言っても、数時間歌い続けるわけではなく、1時間に数分ほど歌う軽いものだ。

最近アギ隊長が眠るのを見ると、その後私も一緒に眠ってしまったりする。

日が昇る前にアギ隊長は目を覚まし、支度を始めた。

その音で私も目が覚めたがあまり直視しないよう、視線を動かす。窓の外を見ると、東の空が緑色と紺色のまだら模様となっていた。

ここへ来た当初の空の色はひどく、昼間でも暗く紺と緑のまだら色をしていた空は、ここ最近色は色に戻り。

晴れた昼はきれいな青色をしていた。

太陽が昇る前だから、空が暗いのは分かるが、緑色はおかしい。

もつとよく見ようと窓に近づくと、すぐ後ろからアギ隊長の声が聞こえた。

「何か見えるか？」

これは振り向くと近すぎる距離になるな、と思い。どきまぎしながら、そのままの状態で返事をする。

紺と緑のまだら色の空をした方角を指差す。

「空の色がおかしいですか？」

私の指差したほうを、アギ隊長も確認したのだろう。

「・・・ああ。まあ、近いうちに何とかする。」

どうやら、すでに知っていたようだ。

「何とか？」

少し不安に思い振り向くと、やはりアギ隊長の顔が近くにきていた。アギ隊長の大きな手が私の髪を数度なでる。

「何とかしてくる。」

朝の班と交代する前に、ラークスを見つけ、何が起こるのかを聞いた。ただし。

嫌な予感がしたのだ、あの人が無茶な行動を起こすのではないかと。「魔族の軍隊が武装して一箇所に集まりつつあるそうだよ。それを放って置くと、大変なことになるじゃないか。」

もつと集まって、そのまま攻めてこられたら、被害は莫大なものになる。

だから、第3隊が突っ込んでいって、戦力を落としてこようって話だったね。」

「突っ込む・・・。」

「大丈夫、ここには第4隊が残るから、心配ないよ。」

肩をぽんと叩かれ、ラークスは仕事に戻ったが、私はしばらくそこを動けなかった。

その日の夜、いつものように歌を歌い、アギ隊長の寝顔を眺める。

一緒に寝る気にもなれず、ずっと起きて、髪をなでていた。

もうすぐ、目を覚ます時間が来てしまう。

そうすると、彼は戦いに出て行くのだろう。

綺麗な銀髪をなでながら、整った顔を見る。

怖いけど、目が離せない人。

今回の戦いも、この人なら嬉々として出て行くのだろう。

本当なら行かないでと言いたいけど、そういう事を言っていられる状況ではないのはわかってる。
それなら、私ができることは。

「泣くな。」

アギ隊長はいつの間にか目を覚ましていて、私の目から落ちる涙を拭おうと手を伸ばしてきた。

その手を左手でつかみ、右手をつかって彼を抱きしめた。

「呪われて帰ってきてもいいから、死なないで。」

死ななければ、私があなただを救うから。絶対に救うから。」

必死になっていったのに、胸に抱きこんだ彼は笑った。

少しむっとして、体を離してにらむと。

「すげえ。お前、最高だな。」

そう思ったかと思うと、体を起こし、顔をぐっと近づけてきた。

寸前でとめて、たずねて来る。

近い！

「キスなら、問題ないだろ？」

きっと私の顔はこれ以上無いぐらい真っ赤だろう。返事を返すことも、うなずく事もできない。

瞬きを一つすると。

アギ隊長が、噛み付くようにキスをしてきた。

どのくらい経ったか分からない、長いキスの後。

「やばい。」

と言った。アギ隊長の言葉で終わった。

深い息をついた後、アギ隊長は支度をするべく着替え始めた。

私が余韻でボーっとしている間に、アギ隊長の支度は終わったらしい。

私のおでこに一つキスをした後
「行ってくる。」

といい、出て行った。

彼が帰ってくるまで、ほんの数日だったが。

戻ってくるまで、そわそわして落ち着かなくて。トレニアからは

「まるで、ネズミみたいね。」

とまで言われた。

第3隊が出発して5日後の昼。

当番であつたため、聖堂で歌っていると、人のざわめきが聞こえてきた。

どうやら、第3隊が戻ってきたらしい。

嬉しくて、心配で、すぐに駆けていきたかつたけど、今は仕事 중이다。我慢我慢。

そう思っていると、聖堂の扉が開き、騎士たちが入ってきた。

どうやら、呪いを浄化するために被害にあつた人が連れてこられたようだ。

歌いながら、目当ての人物を探し出そうとするが、どこにもいない。まさか・・・と嫌な考えがよぎった、その時。

扉から開き、また新たな患者が運び込まれた。

その中に銀色の髪をした人、アギ隊長がいた。

その肩には呪いを受けていると思われる騎士の一人を肩に担ぎ運んでいた。

どうやら、アギ隊長は怪我や呪いは受けていない様子だ。

よかった。

本当によかった。

アギ隊長はキヨロキヨロと周りを見渡し、私のところで視線をとめると。

ふわりと笑った。

私も涙目で笑い返す。

と、アギ隊長はこちらへすたすたと向かってきた。

まさか。と思ったが、やはりそのままの勢いをとめることなく、私に抱きついてきた。

仲間はびっくりしていて、騎士の皆さんはやし立てて、とても恥ずかしかったけれど

戻ってきてくれた嬉しさが勝り、私も抱きしめ返した。

・その後、キスまでされたのは納得がいかないけれど。

それから数日間は治療におわれ、休む暇も無かったが。
2週間も経てば、落ち着いてきた。

仕事が終わりに、部屋へ戻っていると、途中でアギ隊長と出会う。
ちょうどいい。そうだった彼は私に近づく。

「明日の午前中は一緒に町へ行こう。」

一枚の紙をこちらへ見せて

「休暇届を出してくる。」

私は昼の班なので、朝出かけても問題は無い。私がうなずくと。
髪をぐしゃぐしゃとされる。

「今日は明日に備えて、ゆっくり休めよ。」

と、いうことは、今日はアギ隊長の部屋に行かなくてもいいということだ、よね。

少し寂しく思いながら、部屋へ戻り、明日のことを考えながら眠りに落ちた。

いつもは紺色のAラインの太ももまであるスカートに腰あたりを紐で縛っているだけのシンプルなものを着ているが

朝起きて、いつものようにいつもの紺色の服を着たとき

ふと、これはデートなのではないかと気づいてしまった。

そう思ってしまったら、着ていくものにも髪型にも色々気を使ってしまう。

かばんをあさり、たんすを開け、髪を縛る紐を捜したが、一向に納得できるものが出てこない。

都市から出てくるときに物をつめる時間は3時間、しかも限られたものしか持ってこれなかったため

お洒落なものなど何もここにはないのだ。

しかも、自分がデートなどするとは思っていなかったから、本当に何も無い。

半分泣きそうになりながらパニックに陥っていると、ドアを叩く音がした。

小さく返事をする、アギ隊長が顔を出し。

散らかった部屋を見渡すと。

「大掃除でもしてたのか？」

と首をかしげた。

私が情けなくてベットに突っ伏して顔を隠すと

おなかに手を回し持ち上げられ、そのまま荷物のように肩へ担がれた。

「いくぞ。」

担がれながら、アギ隊長の姿を見ると、アギ隊長も普段着ているような姿だったので

まあ、いいか。と思えた。

塔の1階まで降りると、ストンとおろして貰え、少しよってしまつた服のしわを伸ばし整えていると、右腕をとられ、そのまま歩き出

した。

町を見渡しながら歩いていたが、思っていたよりお店がたくさんあった。

どうやら、ここから南にあるカツシア国と我が国であるレウイシア国との中継地点となっていていろいろで。

荷物を運んでいる人の姿がよく見える。

周りを見ながら歩いていたため、アギ隊長が立ち止まったことに気づかず、つないだ手を引っ張って戻される。

そのまま、手をひっぱられ、周りに比べてお洒落な小さなお店へ入っていく。

チリンと小さな音が鳴ると、店の奥から背の低い丸めがねをかけたおじいさんが出てきた。

私たちが入ったお店はなんと宝石のお店で、中はどこもきらきら輝いていた。

「欲しい物があつたら、言えよ。じいさん青色の石ってない？」

「あるよあるよ。」

陽気なおじいさんらしく、鼻歌を歌いながら奥に戻る。

もしかして、私の目の色と合わせて何かプレゼントしてくれるのだろうか。

悪いなと思いつながら、嬉しくなってしまう。

今度、私も何かプレゼントしてみよう。

「私、紫色が好きです。」

アギ隊長の瞳の色。

すると、アギ隊長はにやりと笑う。

「青は俺の。お前は紫だな。じいさん紫色も頼む。」

色々な青い石を布の上に並べて戻ってきたおじいさんはその言葉を

聞くと

「はいはい」

といってまた奥へ戻っていった。

お互いの瞳の色に一番近い色の石を選ぶと

おじいさんが、とりつけるのに1時間ほどかかるから少し待っててね」と言って奥へ戻っていった。

待っている1時間は外にでて近くのお店へ入り。朝食を済ませている間に終わった。

おじいさんが包んでくれた、小箱を受け取ると。また手をひっぱられ、どこかへと早足で向かう。

行き着いた先は町の中央にある女神像の前。

向かい合って、アギ隊長が小箱を開けたとき指輪が見えた。

まさか、いや、え、まさか！

と心の中であせっていると。

アギ隊長が、私の指に紫色の石がついた指輪をはめて言った。

「結婚しよう。」

私の頭の中は真っ白だった。

返事をしない私に、アギ隊長はほんのり頬を染め、少しすねた顔を
して。

「神様の前で結婚の報告をするもんなんだろ？」

私の顔も徐々に赤くなる。

「わ、私と・・・？」

「他に誰が？」

顔を近づけてこられたので、ぎゅっと目を瞑る。
流されちゃだめだ！だって

「アギ隊長は・・・きつと、勘違いをされているだけだと思います。」

「はあ？」

目を瞑っているから分らないが、きっと怖い顔をしているのだろう。

目を閉じててよかった。

「あの時、私じゃない人があそこに通りかかっていたら・・きっとアギ隊長は私なんか見向きもしなかったと思います。」

言ってる泣きそうになる。

いままで思っているても、アギ隊長の傍にすることがいつの間にか好きになっていて。

彼が飽きるまでと思いつつ今まで過ごしてきた。

だって、私じゃなくてもあの状況なら誰でも助けるだろう。私が特別なことをしたわけじゃない。

だから。私にはアギ隊長に特別に好かれる要素なんて本当は何も無い。

目を見開き、アギ隊長の目を真正面から見る。

「勘違いしてはダメです！」

「お前が俺を救ったんだろ。」

目を開けたことを早々に後悔しました。

ものつ淒いにらまれてる。しかも真正面から真近で！怖い！！

「まさかお前も、勝手に救っておいで。直ったからって手を離すのがやり方か？」

先日、食堂で同じ仲間の聖術師であるラークスが下品な話をしていたが、その話を今持ち出すのですか！？

しかも同類扱い！

「違います！」

「なら問題なんか何も無い。俺を救ったのはお前で、あの時からそばにいたのもお前。これからも傍にいるのはお前だ。だろ？」

そういつて、私を抱き寄せ、キスをしてきた。

軽いキスをして離れた彼は、もう一度尋ねてきたので。

泣きながら、首を縦に振った。

その後、少し泣いて落ち着いた私は彼の指に青色の石をはめた。その青色の石をぼーっと見つめていると。

アギ隊長が、私の左手を取り。

「もうそろそろ、交代の時間だろ？楽しみは今夜か。」
にやりと笑ってこちらを見てくる。

「まさか・・それ目的じゃないですね。この結婚。」

半目で疑って見ると。同じような目をして見つめ返してきた。

「ラークスは良いのに、お前は駄目ってのはおかしいよな。」

ああ、そうだった。

独身者であるラークスが大きい声で下品な話をしているとき、アギ隊長も参加していて

少し離れた位置でご飯を食べていた私に向かって冷ややかな目をしていた。

実は以前言った、聖術師は結婚するまでみだりに行為をしないという言葉。

あれは聖術師の理想の形であって、規則ではないのだ。

それでも、私の意志を尊重してくれた、アギ隊長。

もう、何もいえません。

平和とはいえない世界で、お互いに危ないことがいつ起こるか分からない状況だけど

一緒にいられる幸せを楽しみましょうか。

後編（後書き）

最後まで読んでくださって、有難うございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1849u/>

聖術師と銀の隊長

2011年9月17日20時04分発行